



### ユネスコ会員綱領

心の中に平和の守りを固めよう  
 すべての人間の尊厳を重んじよう  
 教育・科学・文化の発展に努めよう  
 民族間の疑惑と不信を除こう  
 世界を友愛と信頼のきずなで結ばう

## 新しい企画と実践を

### 日ユ協理事會に出席して

顧問 内海 巖



去る六月二十九日から七月三日までパリで開かれた世界ユネスコ協会クラブ世界大会で、世界ユネスコ協会クラブ連盟が結成され、初代会長に日本ユネスコ協会連盟会長・数納清氏が満場一致で選出された。日本が世界に先がけて民間ユネスコ運動をはじめ、今日まで地道な努力を重ねてきたことが国際社会で高く評価された結果である。

日本がユネスコ運動の世界のリーダーとなったことは誇つてよいことだが、それとともに、各地域社会でユネスコ活動を展開する我々にも大きな責任が加わったことを自覚しなければならぬ。

日本ユネスコ協会連盟理事会でも確認したことであるが、これからの我が国のユネスコ活動

としての取りくみで特に重視すべきことは二つある。一つは、異文化理解をどう進めていくかという問題であり、他の一つは、科学技術に関する諸問題を地域社会のレベルでどうしたやり方で取りくむのかという問題である。前者については異文化国際理解を正確にするには異文

#### 随想

#### 「橋」

広島市が使用している封筒には、「世界平和をめざす水と緑と文化のまち」と書かれている。市民も水と緑は豊富なまちと自負している。一昨年大広島音頭の歌詞応募の中でも川、橋、鯉、平和が圧倒的に多く読みこまれていた。水にかこまれた広島市には川が多く、橋が多い。広島を訪れる人によく質問を受ける。橋がいくつあるかと？ 調べ

化を相互に理解できるまでに、自らの資質に含まれている問題点をみつめ直し、世界市民として生きるにふさわしい資質を啓発する具体的な対応策を明らかにし、地域社会で実践しなくてはならないだろう。

後者についていうと、現在科学技術は人類の福祉のためにも

てみたら、二、一四九あった。私も通勤に歩いて四つの橋を渡り、三つの橋をバスで渡っている。三十キロの距離にこれだけの橋を渡らなければならない。他の土地にはこんなに橋があるだろうか、山道を歩かない私は橋を渡りながら考える。橋のなかった時代の祖先の人たちは舟を利用していたにちがいない。また、丸木橋で洪水があるたびごとに困ったことであろう。

西洋の諺に「橋にやってきて、橋を渡ればよい。」というのがある。西洋の昔の人も橋には苦

人類の破滅のためにも使用される危機にある。人類の平和と福祉のために今こそ人類の英知を結集すべき時であるが、科学技術の進歩の恩恵に浴していない諸民族のためにも、各種の公害に苦しむ日本社会のためにも、自然環境の保全と地域の産業開発とが調和のとれる状況であるという、新しい生活空間の展開が工夫されなくてはならないと考える。

広島ユネスコ協会のこれからの事業や青年部の運動においても、こうした観点からの企画の再検討が求められるように思われる。会員各位のご考慮をお願いする。

労したのであろう。今かけかえ中の万代橋の北側に歩道用の木の橋が架けられている。私はこの橋を渡るのが大好きである。木であるため、歩くのに柔らかさがあり、歩道用とあって、自動車におどされる心配がないので気持ちがいい。橋とは岸と岸をつなぐものである。橋に特別多くの関係をもっている広島の人々は都市像である国際平和文化都市にもっとも適応した環境にもあるだろう。

(常任理事 深崎敏之)



# 広がる若者の輪

## 高校生のつどいを開催

「コレハ：パークレイノ：ガクセイノ：タテモノデス：ツクッタモノデス。コノ、キ：ト：ゴミヲ：カイガンノ：ソバノモノデス：」 八月十八日の夕闇迫る頃、たいどう彫刻村の談話室で、ローラ・ホームズさんの日本語によるスライド解説が続く。質問をする者、彼女の日本語を助ける者、十三人の心が一つに融け合って、彼女の汗だくの解説を「理解」しようと時を忘れる。

「ユネスコ高校生のつどい」生徒準備委員会の、年来の念願であった「夏期合宿」が、今年初めて実現した。安芸高校、第一女子商高校、広大附属高校の生徒準備委員七名、深瀬文恵理事、山根繁徳理事、佐々木周二教諭、市教委社会教育主事藤野信也氏、同指導課ローラ・ホームズ嬢に筆者を加えた十三名が起居を共にした一泊二日のセミナーのひとつである。

「高校生のつどい」は今年で四回目を迎える。昨年から、会の企画・運営を生徒自身の主体的な取り組みに委ねているが、彼らの昨年の反省の一つに、ただ何回か集まって話し合うだけでなく、せめて一泊でもよいから合宿によって、まず準備委員相互の交流を深めていく中で、

国際理解につながる何かを求めたい、という願いが表明された。今夏来日したばかりのホームズ嬢を講師に、来たる十一月八日の「つどい」の企画立案のためのセミナーはこうして生まれた。

昨年、広大附高の準備委員から、「つどい」の前にはほんの一時間だけでも、コアクシヨン街頭募金に立たないか、と提案があった。さまざまためらいがあったものの、思い切つて実行した。

今年三月、西宮市で、第五回青年ユネスコ中央リーダー研修会、及び、一九八〇年度日本青年ユネスコ連絡協議会第十五回通常総会があり、出席しました。リー研では、(A)組織運営、(B)普及活動、(C)コアクシヨンの三つの分科会があり、私は、A分科会に参加しました。また、日青ユ協・総会では、一九八〇年度の事業報告及び、一九八一年度の事業計画を中心に討議されました。いずれの会も話が進むにつれて、意見を活発に出す人、聞く人との色分けが少しずつ鮮明になっていきま

### 協会・青年部に接点を

行したあとの感想はそれぞれ行動した者にのみ与えられる貴重な体験であった。今年も是非参加したいと言う。

一昨年の「つどい」は映画と講演であった。昨年はゲームで雰囲気を作り、市教委の外国人講師三名を囲む三つの輪を作つて話し合った。今年は「私達だけで決めてみますから、先生方は彫刻でも見に行らっしゃってください。」といつて延々二時間近く真剣に討議する姿に思

した。この、近年にない意見が活発にだされた総会ではありましたが、その実「活発な意見」の大半は、広島県青年ユネスコ連絡協議会の者達からのものでした。ところが、宿にもどつてからの、オールナイトルームと称する親睦会での雑談のにぎやかなことといたら、これが同じ顔ぶれでのものかと、驚ろかさされるありさまでした。

しかし、全国大会や中国ブック・ユネスコ研究会などで協会、青年部が同席するような催しに参加した際にも、協会の方青年部の者、いずれにも同様な

わずわが身を正した。今年も、全国高校ユネスコ研究大会のテーマ「ともにつかもう生きる喜び」を掲げ、高校生同志の話し合いの時間をも設けると言う。実現に奔走して下さった市国際交流課藤井正一理事、快く過分の差し入れを下された芸備倉庫社長古川浩司氏に紙面を借りて心から感謝申し上げる次第である。(国際交流担当常任理事・永田龍男)

光景を見ることがあります。青年達は、若いから頻繁に例会が持てると言われてはいますが職種などによっては、退社時間が遅くなる、一定していない、休日出勤があるなどの理由で、ほとんど例会に出られない人も多数おられます。

協会の会員でも、行事に頻繁に出席出来る人、出来ない人といふと思えます。協会と青年部を、年齢だけで区分けするのが適当なものであるかどうか検討してみるべきではないでしょうか。協会、青年部、高校生の現在の構成から、時間の都合などで一致する者で新グループを設けるなどしてはどうでしょうか。

(青年部・榎原清)